（もうすぐか）

腕時計を一瞥して本日の終業時刻まであとわずかなことを尾刃カンナは改めて確認した。普段なら職務に集中してそんなことはありえないのだが、今日ばかりはつい気が急いてしまう。

――――自分はそこまで先生のことを意識してしまっているのか。

犯人の心理を分析して追い詰める習慣を、こうして自分にも適用してしまうとそんな心の内側まで透けて見えてしまう。とはいえ感情の衝動から来るものは表に出さないことは出来ても、意識をしないことはできない。

ふぅ…と大きなため息をついてカンナは本日分の決裁書類の取りまとめにかかった。

『先生、今どちらにいらっしゃりますか？』

『ごめんカンナ、鐘崎港の八番倉庫街にいるんだ』

『またそのようなところに…分かりました、パトロールがてら向かいましょう』

『ありがとう、そうしてもらえると助かるよ』

あんな夜は不良生徒かギャングしかいないような場所に…とカンナは思うが、だからこそ先生がそこにいるのだろうとも思う。

「『健やかなるものに医師はいらず。病者のためにこそ医師はあり』か…」

そんな聖句があったなと思い出しながらカンナは倉庫街へと向かった。

「もう分かんねぇよ先生！終わりだよ！！！」
「ギャハハ、まだ四問目で止まってやんの」
「うるせー！なんでそっちはそんなに進んでんだよっ」
「やればできるんだよ、アタシは」
「ちくしょう、見せつけやがってぇ…！」

プリントを前に騒いでいるチンピラ少女たちの前で苦笑しながら、先生は一番進みが遅い子に話しかけるタイミングをはかっていた。大体の生徒は実は勉強はある程度やればできる。しかし、詰まりやすい子、応用をきかせにくい子というのはいるものだ。

「ねぇ、１個前の問題は割と早く解けたよね」
「あー、この２Ｘ＝５Ｙってやつ。なんだっけ…この中から答え選んで…ああ、ＸがＩＯでＹが４だ」

「そうそう。じゃあ今回のー／４Ｘ＝２Ｙはどこが難しい？」
「ええええ？えっとぉ…うーん…」

問題に詰まる生徒の多くは、分からないところが分からない。いや、正確にいえば分からないことを言語化できない。この場合は単純にー／４とされている部分に詰まっているのは間違いないのだが、それをこちらから言い出してしまうと解決にならないのが難しいのだ。
そこに気づくまで彼はじっと我慢する。周囲の少女たちはその間に用意したペーパーをそれぞれのペースで進められているが、時々分からない点については

「なぁ先生、これってさ…」
「ああ、そうだね。ちょっと複雑になってくるからマイナスについても考えなきゃいけないんだ」
「あーーーー…やっぱ？面倒くせぇなぁ…」

と質問しに来る。そんな、薄汚いコンテナを机替わりにした夜空の授業。
潮風が吹いて飛びそうになるプリントを手で押さえたまま、彼は一番詰まっているチンピラ少女から少し目線を外してプレッシャーをかけないようにしていた。そうして待つことしばし、少女は何かに気づいたように

「あ！？」
「うん？」
「いや、でも…間違ってるかもしれないし…」
「大丈夫だよ、授業で間違えるのは普通だって言ったでしょ？」
「う、うん…じゃあえっと…これってさ、ひょっとして…１／４を４倍にしてＩにしてもＸとＹって…変わらない？かも？」

普段は虚勢をはって肩を怒らせた少女が、おどおどと不安げにこちらを見上げながら聞いてくる姿を見ると、彼女も守るべき生徒のひとりなのだと改めて痛感する。先生は大げさな身振りでうなずいて、

「すごいじゃないか！よく気づいたね」
「え！？そう！？へへへ…」
「それが答えへのわかりやすい道筋だよ。そういうときは２Ｙの２も４倍にすることを忘れずにね」
「あっぶね。そっかそっか…」
「なんだよできんじゃねーか」
「へへへへへー、すぐに追いついてやんよ」

そんな明るい彼女たちの様子を眺めながら、先生は静かに目を細めるのだった。

「お疲れさまでした」
「いや、大したことじゃないよ。あれであの子たちの再テストは大丈夫だ」
「そうですか」

倉庫街でチンピラたちの補習授業を終えてすぐ物陰に控えていたカンナと先生は合流した。肩を寄せ合って歩く姿がふたりの関係性を如実に示しているが、それをあげつらうような無粋な人間はこの夜道にはいない。

「どれほど教えられていたのですか」
「一時間くらいかな。普通の学校の授業よりちょっと長いくらいだよ」
「なるほど、それで脱落する生徒が減るなら安いもの…ということですね」
「うん。それぞれの学校の先生たちも頑張っていると思うんだ。でもどうしても足りない部分は出ちゃうからね…私がそこを補えれば、って感じかな」
「ご立派な考えだと思います、先生」

色気のない話だとカンナは自嘲する。
これからこの人と夜を共にするというのに、色気のある誘い方のひとつも自分には思い浮かばない。

ただこのような当たり前の会話しかできないのだ。
もうちょっと気の利いた言葉がかけられれば、この胸に秘めた高鳴りも少しは発散できるかもしれないのに、抱え込むことが精いっぱい。
傍らに立つ大人の男性はカンナの知っている大人たちと異なり、生徒の成長を素直に喜びにしているようだ。我がことのように笑うその様子を見ていると、こちらまでつられて嬉しくなってしまいそう。
既にふたりの歩みは歓楽街へと進んでおり、その爛れた雰囲気の中でもなおそんな話を続ける彼もまた色気のあるタイプではないかもしれないが、愛しい人の喜びに水を差すこともないだろうとカンナはと相槌を打ち続ける。

――――そうしていると目的の場所へとついた。
これから脱ぐというのに、先生は一度ネクタイを締めなおすと「よしっ」と気合を入れるような声。
不思議に思いカンナは

「どうしたのですか？」
「いや、ここまではお仕事のお時間でここからはプライベートな時間だからさ、切り替えようと思って」
「そういうものですか…」

ホテルの前で彼はカンナへと向き直ってその瞳をまっすぐ見据えると

「そういうものだよ。だからこれから私はカンナを独占する、私たちだけの時間だ」
「……ッ、あなたの…あなたのそういうところが…」

――――――ズルい。

その言葉は飲み込んで男の肩を抱き寄せ、まるでついばむようなキスをする。

「……なら、証明してください。私が、あなたのものだと」

「あぁぁぁぁぁ！！！す、すごいいいいィィィーーーーッ！！！！」

蒸気で満ちたシャワールームの中、ベッドまで待つことのできなかった二匹の性獣は激しく交尾を交わしていた。

出しっぱなしのシャワーヘッドから熱が立ち上るその中で結ばれた尾刃カンナは、サウナのようにのぼせた感覚の中でガラス戸に乳房を押し付けられたまま声をわななかせる。

シャワーを浴びるためにまとめた髪が大きく揺れ、後ろから犯す先生の鼻腔をくすぐる。それすらも快楽のエッセンスにしながら男は執拗にカンナの奥を貫いた。

「ひぃぃぃ、ひぃぃぃぃ、そこぉ…！」

崩れ落ちそうになる腰をなんとか両手で支えながらカンナは歓喜の声を上げ続ける。密壺の中を肉棒によってかき回され、愛液だかカウパーだか判別の尽からない混合物が股をしたたり落ちる。
シャワーの熱で汗と流れる愛液が溶ける感覚。それがカンナの性感を高め、ただでさえのぼせそうな状況なのにもう頭がおかしくなりそうだった。

「あァン…先生のモノが、私の中で大きくなってェ…んぁぁぁぁ！？」
「カンナ、中へ出すよ」
「あぁぁッ！きてぇ……あぁ！！……きてください……ふぁぁぁぁぁァァァ！！！！」

熱い精液が体の中で放たれると、その感覚に絶頂しそうになる。しかし男の腰は止まることなくさらに注挿を早める。一度の射精では先生の肉棒は満足していないようだった。

「あァァッ、激しい……先生、もっとぉ……！！！」
「カンナのお望みのままに」
「はひぃぃぃぃ！これ、気持ちいぃぃぃぃぃ！！！イきそうに、ひぃ、いぃぃーーーーーッ！！！！」

立ちバックの体勢でカンナの腰を引き寄せた先生はさらに奥まで肉棒を突き入れると、再びピストン運動を始める。
立ちながら犯すという変態的な行為もふたりの興奮を加速させるスパイスにしかならないようで、先ほどから何度か軽く絶頂しているカンナの膣はぎゅうぎゅうと先生の肉槍を締め付けていた。

「ひぃいいいいッ！イイ、イイです！！これ、もっと、もっとおぉぉォォォ！！」
「欲張りさんだな……！いいよ、サービスだ！」
「んひゃぁぁぁぁ！！！また出てるぅぅぅぅーーーーーッッッ！！！」
ラストスパートに向けて腰の速度を速めた先生が再び膣内に精を放つと、カンナは悲鳴を上げてそれに応えた。
立ちながらイかされた彼女はふらりとよろめくがそれを後ろから先生が支える。
「ハァッ…ハァッ……ん……ふぅ、先生…」
「うん？」
「続きはあちらで…んんんっ…ふふっ、私も火がついてしまいましたよ」

カンナは熱い吐息を吐きながらガラス戸越しのベッドを指さす。股間からあふれ出た白濁の液体を弄ぶその表情は先ほどまでガラス戸にしがみついていた弱々しいものではなく、『狂犬』と呼ばれる女性に相応しいものへと変わっていた。

「ふ、ふふ…私もサービスして差し上げましょう。私の『これ』で、ね」

ベッドの上、寝そべった先生に対して乳房を見せつけるようにして笑う。普段はジャケットに隠された大きな双丘は、今やその封印を解かれて獲物を今にも喰い尽くさんと震えていた。

「――――知っているんですよ？先生が屋台で隣に座る私のこれを時々眺めていたのを。ねえ？」
「あはははは…いや、その…」
「そういえば濡れてしまってノーブラの私にも好奇の視線を向けていましたね？思わずセクハラをしてしまうほどに興味を持たれていたようですが…今、興味の対象が目の前にある気分はいかがです？」
「えっと、そういわれると困っちゃうな…」
「おや、先生ともあろう方が言葉を濁されるのですか。それは困りましたね…」
「んー…じゃあ壮観です、とか…あ、違うな。この場合は挟んで欲しいです、かな」

正解です、と口角をあげる。そうして膝立ちになると、そのたわわな果実で男の獲物を挟み込んだ。

「んっ……ふっ…んっ。いかが、ですか？」
「うん、すごく上手だよカンナ。柔らかさと強度が良い感じで……」

「ふふっ、私の乳房の間でもうパンパンになってますよ。ああ…先生もさすがの硬度ですね」

カンナの胸に埋もれて上下する男の肉棒は早くも硬さを取り戻し、爆乳の谷間から顔を出していた。先ほどまで自分の中に入っていたものを今こうして弄んでいるという状況に興奮を覚え、カンナは

「んっ……んんっ……ふぅ、んっ……」
「すごい、カンナ！もうこんなに、くっ……あぁ！」
「まだこんなものではないですよ。もっと気持ちよくして差し上げますから」

胸の間で熱を放つ肉棒に熱い息を吹きかけると、さらに速度を上げる。ぶるんぶるんと躍動する音が部屋に響き渡り、時折男のうめき声が混じった。

「ふふっ、しかしそろそろ限界のようですね」
「か、カンナのパイズリが気持ち良すぎて…あぅぅ！」
「嬉しいこと言ってくれますね。では、あまりいじめすぎても失礼というものでしょうか…ほら！！！」
「ッ！？」
谷間から顔を出した亀頭に口づけすると、一気に胸の谷間へと押し込む。ぎゅっと押し付けられた爆乳がその肉棒を根本まで包み込んだ。

「あ、ああ……っ！」
「ほら、遠慮なさらず……この胸で果ててください」
「く、くぅぅぅ！？」

両の乳房が圧迫されることで生まれる圧力に我慢しきれなくなった男は思い切り精を放つと、その快感にのけぞった。
しかしそれでもなおカンナの胸は最後の一滴まで絞り出そうと動き続ける。

「あ、あぁ……すごい、カンナ……」
「ふぅ……ふふっ、楽しんでいただけましたか？」

谷間から顔を覗かせる肉棒がすっかり柔らかくなったのを確認して胸を解放すると、男は切なそうな声をあげながらもどこか満足そうな顔をしていた。その様子に小さく笑みを浮かべると、カンナは先生に背を向けて馬乗りになる。

「軽く腹ごなしの運動をしたらまた空腹になってしまいました。先生、もっと食べてしまっても？」
「……は、はは。――――まぁ私もまだまだ元気だから、とことん付き合うよ」